

『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』における 女性の在り方

-大江健三郎の女性観を中心に-

洪 珍 熙*

目 次

1. はじめに
 2. 作品の構成
 3. 死に襲われる「男たち」と生き残った「女たち」
 4. メタファーとしての『^{レイン・ツリー}「雨の木」』と女たち
 5. おわりに
-

1. はじめに

大江健三郎の『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』は1982年7月に新潮社から刊行された連作短編小説集である。この作品は一つのメタファー（暗喩）である『^{レイン・ツリー}「雨の木」』を中心にその木を巡る女性たちを素材にした五つの短編で構成されている。まず、この作品の特徴については、次のようなことが述べられる。

作者大江は彼の文学世界において「初期」と言える1950年代と60年代の前半以降、長編小説を中心に文学活動を続けてきた。だが、「短編連作集1）」という形で『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』を刊行することで、作風や作者自身におけるある種の変化を示した。そして、このような変化の原因だと見受けられる内容が、「泳ぐ男—水の中の『^{レイン・ツリー}「雨の木」』」（連作短編集の中で5番目の作品）の最初のところに書かれている。

もっぱら長編を書いてきたこの十数年間、僕は、草稿を書く間に、あるいは定稿としてしあげ

* 京畿大学校 講師 日本近現代文学

1) 大江が「短編連作集」という形で作品を書いたことに對して山田有策は、「『同時代ゲーム』でみられ六つの〈手紙〉という構成の変形にすぎない」とも述べている。（『国文学』1983.6、118頁）

るまでに、なんらかの事故が起って、作家としての自分が存在しなくなるのではないかと不安に思うことはなかった。ところが、長編の「^{レイン・ツリー}雨の木」小説を書きはじめから、當の不安に面つきあわせてしばしば考えこむことになったのである。僕が「^{レイン・ツリー}雨の木」の短編のすべてにその翳をまといつかせることをした、マルカム・ラウリーという作家の運命を切實に感じるようになったのと、同じ理由でそれはあった。ラウリーは現に僕がいる年齢をよく乗りこえなかった。その思いも、やはり漠然とした危機感だが、人が死にむけて年をとる、ということに直接むすんでいる。（「泳ぐ男—『雨の木』」、下線稿者）

語り手「僕」を通しての叙述ではあるが、作品全体にわたって見られる「死」に対する漠然とした危機感は、四十代に入った中年男性の作者大江や彼の作品に何らかの影響を与えたと推測される。

それから、『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』におけるもう一つの特徴と言え、大江の分身とも言える語り手「僕」による書き方とその自伝的な内容が「私小説」と類似している点である。作品の中には作者大江に起きた実際の出来事をはじめ、彼の周辺に實在しそうな人物たちが次々と登場している²⁾。しかし、「私小説」と似たこの書き方については、「フィクショナルなものとアクチュアルなもの、その二つが非常に微妙にうまくからみ合って、しかも相乗しながら、一つの世界をつくりあげていく」³⁾大江獨特の作法だという意見が一般的である。後藤明生によると「私小説が読者に求める登場人物に対する感情移入、あるいは心境の一体化という書き方は手法的にされていない」⁴⁾ので、伝統的な「私小説」と違うとも評されている。

上述したように、『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』は大江の久々の短編小説ということで文壇の注目をうけた作品であり、「私小説」を真似た彼の獨特な書き方や方法論が批評の主な対象となってきた。その中で、『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』に登場する「女たち」については具体的に述べられることがないか、見過ごされたような気がする。このような背景には、『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』というタイトルの割には、語り手の「僕」や僕の友人といった男たちの話がストーリーの多くを占めており、相対的に女たちの存在感が薄く感じられたことにその原因を見出すことが出来るよう。

それで本研究は、メタファーである「^{レイン・ツリー}雨の木」を希求する「女たち」の在り方を考察すること

2) 『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』は、作者大江のメキシコやスペイン、ハワイといった外国での異文化経験を基に描かれている。それから、作品の登場人物には家族以外に、武満徹を連想させる音楽家「T」や文化人類学者の山口昌男を思わせる「Y」をそれぞれ登場させている。

3) 「讀書座談」『文芸』、1982.10、239頁

4) 「觀念と感情」『文學界』、1981.12、272頁

で、作者大江の女性観を明らかにすることにその意義を持つ。

2. 作品の構成

まず作品分析に入る前に、「連作短編集」という作品の特徴のため、全体的な構成と内容について述べなければならぬと思う。作者の大江健三郎は1980年1月に「頭のいい^{レイン・ツリー}『雨の木』」を『文學界』に発表したことを始めとして、1981年11月には「『^{レイン・ツリー}雨の木』を聴く女たち」（『文學界』）を、1982年1月に「『^{レイン・ツリー}雨の木』の首吊り男」（『新潮』）を、同年3月に「さかさまに立つ^{レイン・ツリー}『雨の木』」（『文學界』）を、5月に「泳ぐ男——水のなかの^{レイン・ツリー}『雨の木』」（『新潮』）を次々と発表した。そして、上述したこの五つの短編を纏めて刊行したのが『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』である。ちなみに、この作品は1983年2月に第34回読売文學賞を受賞した。

『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』の内容における何よりの特徴と言え、空間的背景が殆んど日本ではなく、外国になっている点である。即ち、語り手である「僕」（あるいは、作者大江）の異文化体験が小説の背景になっていることであるが、それを各短編ごとに示せば次のようになる。

【表1】

	題名	空間的背景	登場する女性
第1部	「頭のいい ^{レイン・ツリー} 『雨の木』」	ハワイ	・アガーテ ：ドイツ系アメリカ人
第2部	「 ^{レイン・ツリー} 『雨の木』を聴く女たち」	ハワイ	・僕の妻：日本人 ・ペニー ：中国系アメリカ人
第3部	「 ^{レイン・ツリー} 『雨の木』の首吊り男」	メキシコ	・セルマさん ：アルゼンチン人
第4部	「さかさまに立つ ^{レイン・ツリー} 『雨の木』」	ハワイ	・ペニー
第5部	「泳ぐ男——水のなかの ^{レイン・ツリー} 『雨の木』」	日本（メキシコとスペインでの体験を回想する）	・猪之口さん：日本人 ・自殺した中年男性の妻：日本人

（※以下便宜上、各短編小説の題名の代わりに、「第1部」「第2部」という書き方で示すことにする）

上述した五つの短編にはそれぞれの外国での語り手「僕」の体験や、そこで出会った人々の話が描かれている。各短編における主な内容を簡単に紹介すると、「第1部」では、「僕」がハワイで「アガテ」という女性に会い、彼女から「^{レイン・ツリー}雨の木」という木の存在について教えられる。

「第2部」は、「僕」が「第1部」で語っていなかったハワイでのもう一つの出会い、即ち、大学時代の友人やその妻との間に起きた出来事について述べている。ここで述べなければならないが、『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』という連作短編集は、一つの短編の中で他の短編について語る—たとえば、「第2部」で「第1部」のことを小説として扱っていること—という、複雑な構成を持っている。根岸泰子によるとこのような独特な作法は、「いくつものテキストを自由に越境する私」といった大江健三郎の方法的戦略だと言う⁵⁾。それから、「第3部」では「僕」のメキシコでの体験が、「第4部」では「第2部」に続き、友人の妻とハワイで再会する話になっている。最後の「第5部」では、語り手が日本に戻ってから目にする事件、即ち、男を強姦に誘うある日本人女性の死を巡っての話が主なストーリーになっている。この五つの短編における共通点と言えば、『^{レイン・ツリー}「雨の木」というメタファーを一つの媒介として、語り手「僕」と色々な女性たちの出合いが描かれている点である。それでは、次の章に入って、各作品におけるそれぞれの女性たちの在り方について検討したいと思う。

3. 死に襲われる「男たち」と生き残った「女たち」

「第2部」は次のような語り手の告白から始まっている。

一年ほど前、僕は十数年も書くことのなかった短編を、ひとつ発表した。このように永くそのジャンルから遠ざかっていたことにも、そしていま自分があらためてその分野で仕事をしようとしていることにも、つまり僕の作家としての生き方が、内部から新しく動きはじめているらしいのに、これから書く物語は関係があろう。結局僕は、人が死にむけて年をとる、ということを知っているのだが—ともかくもその久しぶりの短編の主題は、『^{レイン・ツリー}「雨の木」』であった。（「第1部」、下線稿者）

『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』における大きなテーマと言え、救済や生命を暗示する

5) 『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』—メタファーの受胎とその死まで、『國文學』（42/3）、93頁

『^{レイン・ツリー}「雨の木」への希求であるが、その裏側は「死」に対する漠然な恐怖と暗闇のイメージに覆われている。四十代に入った語り手の「僕」は「人が死にむけて年をとる」という思いに耽けり、その擧げ句、不意に訪れてくるかも知れない「死」への恐怖で長編小説を書くことすら出来なくなっていた。そして、「僕」は中年になった自分のことを、「肉体にも情動にもおよそ回復の不可能な、崩壊部分を見出すことをかさねる人間」だと捉えていたのである。

このような「死」への恐怖は「僕」の懸念に終わるだけではなく、「齋木正彰」や「高安カッチャン」といった友人たちをそれぞれ「事故死」や「病死」といった形で襲っていた（「第2部」）。また、僕の恩師であるW先生の死や「カルロス・ネルヴォ」というメキシコの友人が末期癌で死にかかっていたこと（「第3部」）、反核運動を續けてきたKさんが癌で死んだこと（「第4部」）、他人の罪を被って自ら死を選択した中年男（「第5部」）の話など、作品全体は「死」のイメージで覆われていると言っても過言ではない。そして、ここで言う死のイメージは、個人としての人間における死だけではなく、原爆による地球の滅亡という世界の終末をも暗示している。男たちは、中年になって感じる人間としての弱さや核に対する危機意識によって、「死の世界」に襲われていたのである。すると、このように男たちが死に脅えていた時、女たちは死をどのように受け止めていたのだろうか。結論から言うと、作品に登場する女たちは、「玉利君」と呼ばれる青年によって殺害される「猪之口さん」（第5部）を除いては、全ての人が生き残っていた。ここではまず、作品に登場するそれぞれの女性たちに焦点を当て、彼女たちの在り方を検討してみよう。

「第1部」で語り手「僕」は、ハワイ大学の「東西文化センター」のセミナーに参加するためハワイに行く。ハワイの滞在中「僕」は、セミナーのスポンサーたちが主催するパーティーに招かれるが、そこで「アガーテ」というドイツ系アメリカ人の中年女性と會った。そして、彼女を通してはじめて『^{レイン・ツリー}「雨の木」の存在について分かるようになる。アガーテは第二次世界大戦の時にドイツで子供時代を過ごしていたが、母國であるドイツを捨て、ハワイに移住してきた人物として描寫されている。アガーテ自身の表現を借りると、過去の彼女には「本當に恐ろしい不幸なこと——彼女の父親がナチス收容所長であったことを考えれば、彼女の不幸な体験がユダヤ人虐殺のことと強く結ばれていることが推測される（「第4部」）——が起きていたそうだし、現時点で彼女は「精神障害者のための施設」で生活する不運な女性であった。このようにアガーテは不幸な人生を歩んできた。

「第2部」には、語り手「僕」の妻が登場する。僕と妻の間には障害者の息子がおり、妻はその子の世話で相當苦勞してきたことが推測される。その上、結婚當時から頻繁に自殺への衝動を感じる夫のため、彼女の心的な苦痛は重なった状態であった。

また、「第2部」には僕の友人である高安の妻「ペニー（本名はPenelope, Shao-Ling Lee）」の姿も見られる。彼女は少女時代、香港製作の空手映畫で若い女武闘士の出るシリーズに主演

として活躍していた。しかし、その後、様々な不幸に遇い、今は高安との非日常的な結婚生活を過ごしていた。

最後に、「第5部」では、強姦殺人の犯人としてマスコミに取り沙汰された、ある高校教師の妻が登場する。高校教師が事件後直ぐ自殺をはかったため、警察は彼を犯人として断定したが、夫の死に疑問を抱いた妻は、彼の無實を解明するため一人で手を尽くしていた。

上述したように、作品に登場する男たちが様々な形で「死」に襲われていたことに對して、女たちはこの世に生き残っていた。しかし、生き残った女たちは一人残らず不運な存在でもあった。次の引用文には、作品に登場する不幸な女たちの姿を象徴する内容が述べられている。

(前略) いったいどの施設がモデルなのか、「^{レイン・ツリー}雨の木」がある施設を教えてください。私は「^{レイン・ツリー}雨の木」の水滴の音を聞きながら、その下に坐って高安のことを考えていたい。私のとなりに精神障害の女性がいて、私と同じように「^{レイン・ツリー}雨の木」を聞いていてもかまわない。この現代世界には、
私らのような女がいるのだ。（「第2部」、下線稿者）

上述した引用文は、「ベニー」が夫である高安の死後、「僕」宛てに送った手紙である。引用文の中の「私らのような女」とは、作品に登場する多くの女たち、言い換えれば、人生の苦難や悲しみを経験してきた不幸な女たちを指していると考えられる。後藤明生によると「それぞれの女が、それぞれの聴き方で〈^{レイン・ツリー}雨の木〉を聴く。おそらく水滴をしたたらせる〈^{レイン・ツリー}雨の木〉は、この我々の生きている世界＝地球をおおう巨大な悲哀＝涙のシンボル⁶⁾」だという。このような解釋は、「^{レイン・ツリー}雨の木」から落ちてくる水滴を人の涙に譬えることで、不幸な女性たちが抱いていた悲しみを視覚化したことだと言えよう。とにかく、作品に登場する女たちが、あらゆる不幸に耐えながらも生き続けていることが分かる。すると、何故女たちは不幸でありながらも生きることを選んだのであろうか。

作品の中には男たちが自分の信念や世界観に従い、自分本位の行動をする一面を見せていることに對し、女たちは自分より回りの人々の意思を尊重する特徴を見せている。例えば、哀れに死んだ夫の意志をこの世に伝えるため努力する「ベニー」や、夫の冤罪を晴らすため最善を盡くす「高校教師の妻」、また、障害児の息子を育てるため自分の一生をかける「僕の妻」、精神障害者のため奉仕する「アガータ」など、作品に登場する女たちは自分の意志より、誰かのために献身する姿を見せている。言い換えれば、自分本位の男たちに比べて、女たちは主に家族をはじめとする人間關係に中心を置いて生きていることが分かる。そして、不幸な現實生活を生き續

6) 「觀念と感情」『文學界』、1982.12、276頁

ける女たちの姿からは、衰れでありながら忍耐強いイメージが見受けられる。

上述した内容から、『^{レインツリー}「雨の木」を聴く女たち』における男女の在り方は明らかに二分化されていると言えるが、一体このような特徴はどこに基づいているのだろうか。この点について述べる前に、まず、一般的な見解から言う「男性性」や「女性性」について言及しなければならないと思う。

普段女性は、理解深くて、忠誠のある、温情持ちの存在だと言われる。これに對して男性は、信念の強くて、個人主義でありながら、自己満足的なところを持つといわれる。しかし、このような一般的な見解は、男女における本質的な違いというより、男女それぞれに對する社會的な期待と深く関係する⁷⁾。即ち、「男はこうすべきである」とか「女はこうならなければならない」といった社會的な規制によって作られる一種の「ジェンダーバイアス (Gender bias)」⁸⁾と言える。

作品の中では、男たちが自分の信念に従い、獨立的な社會活動をすることに對して、女たちは自分の意志よりは回りの人間關係 (主に、家族) に重点を置いて生きていることが分かる。これを改めて表すと次のように示すことが出来る。

【表2】

男	女
死の世界	生の世界
自分の信念に従う	回りの人の意思を重んじる
個人主義	自己犠牲

「表2」で示しているように、作品における男と女は對照的な形で描かれていることが分かる。特に、男性に比べて女性の方は、誰かを支える獻身的な姿だけが強調されていた。そして、男女に對する作者のこのような捉え方は、實際存在する男女の姿をリアルに描寫しているというより、「ジェンダーバイアス」に基づいた「男性性」や「女性性」を定型化しているように見られる。

例えば、最近まで、自己犠牲的な女性の姿、特にお母さんの姿は理想的な女性像として贊美されてきた⁸⁾。それで、夫や子供といった家族に對する限りない愛情や犠牲は、女の備えるべき美德として教えられてきたのである。だが、嚴密に言うとはそれは、男性中心的な社會の中で女性に要求される一つの義務であり、このような義務によって多くの女たちは仕方なく犠牲を強いられてきた事實を見逃してはいけない。もしも、ある女性が家族に對する犠牲より、自分の信念や主義を重んじるとしたら、彼女は思いやりのない悪女として捉えられてしまうに違いない。

7) 『오늘의 여성학』、전국대학교출판부、2003、37頁

8) 『세여성학강의』、동녘、2005、199頁

『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち』には、死の世界に襲われる自分本意の男たちと、忍耐強く献身的な姿でこの世を生き續ける女たちの姿が描かれている。このような男女に対する異なる描寫は、男性中心的な思考に基づいた作者の理解によると考えられる。そして、このような傾向は、次の章で取り扱うメタファーの「^{レイン・ツリー}雨の木」を通して同じことが言える。すると、「第4章」に入って、「^{レイン・ツリー}雨の木」の定義や、女たちとの関係について検討してみよう。

4. メタファーとしての「^{レイン・ツリー}雨の木」と女たち

この連作短編集で特に読み手の目を引くのは、樹木に対する語り手「僕」の愛着である。そして、この愛着について「僕」は次のように述べている。

僕はある土地の樹木と、そこに生き死にする人間とに、似かよっているところがあるように思うのだ。(中略)僕はあわせて自分の、樹木および土地のその呼び名への愛着についても語った。僕は外国に出るたびにその風土での、いかにもその土地らしい樹木を見ることを楽しみとしている。それも當の樹木の呼び名を知ること、はじめてその樹木をよく知ったと、その樹木に真にめぐりあったと感じるのだ。(「第1部」)

引用文を通して樹木に対する「僕」の深い關心と共に、人間と、その同じ空間に存在する樹木との間に見られる類似性を見つけようとする姿勢が感じられる。そして、このような樹木に対する登場人物のこだわりは、『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち』以外の大江の他の作品にも表れている。

このところ母の言葉少ない説明によると、父は「ピンチ」なのである。これはかつてない「ピンチ」だと父自身認めているともいうことだ。

このところ父がいくらか変わってきたと私に感じられたとしたら、それはポーツとしてるのをよく見る、ということだけだった。私が話を聞いてすぐのショックというより後からゆっくり考え込むタイプなので、父はこれまでも幾たびか「ピンチ」を経験してそのたびに乗り越えて來たのだ、と母はあらかじめ話してくれもした。たとえば群馬の山莊にこもって、あるいはメキシコの大學にゆるやかな勤めを持って。そうした父の避難場所に必要なのは樹木。北輕井澤には白樺やダケカンバ、メキシコ・シティーにはブーゲンビレアや火焰木、今度のカリフォルニアにはライブオークやレットウッド、と父は避難場所に必要なのは樹木をいつもチャッカリと見きわめているのだと、母は深刻な話ながら笑ってもいた。確かに滑稽な感じもあるが、父は樹木に囲まれた谷間で

育った人だから、「ピンチ」には樹木のある所へ歸って行こうとする、と私は憐れな感じでもあった。（「この惑星の捨て子」『静かな生活』）

上述した『静かな生活』の中には、語り手「マーちゃん」の父親、即ち作者の大江健三郎を連想させるある人物が登場する。引用文からも分かるように、語り手の父親は自分の人生におけるピンチを迎えるたび樹木の力を借りてきたことが推測される。その上、外国での滞在経験を通して世界國々の樹木に巡りあい、樹木に對する相當の知識も持っているのである。このような意味で樹木に関する限り、『静かな生活』(1990)は『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』(1982)の延長線上にある作品であると言えよう。

『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』の方に戻ると、「第1部」では、樹木に強い關心を示す語り手「僕」の前にアガーテという一人の女性が現れる。そして、彼女は僕に「あなたは人間より樹木が見たいのでしょうか?」と話しかけながら、ある樹木の方へと案内するのであった。

^{レイン・ツリー}「雨の木」というのは、夜中に驟雨があると翌日は晝すぎまでその茂りの全体から滴をしたたらせ、雨を降らせるようだから。他の木はすぐ乾いてしまうのに、指の腹くらいの小さな葉をびっしりつけているので、その葉に水滴をためこんでいられるのよ。頭がいい木でしょう。（「第1部」）

^{レイン・ツリー}「雨の木」という木を目の前にしながら、僕はアガーテの説明を聞く。しかし、實際のところ、僕は^{レイン・ツリー}「雨の木」の眞の實體を見ることは出来なかった。何故なら、僕がアガーテに導かれて^{レイン・ツリー}「雨の木」を最初見たのは夜中のことであり、僕は暗闇の中に立っている巨大な物体を眺めたことに過ぎなかったのである。

笑い聲とざわめきをなお背なかにまといつかせて、僕は水の匂いのする暗闇を見つめていた。その暗闇の大半が、大きい樹木ひとつで埋められていること、それは暗闇の裾に、これはわずかな光を反映するかたちとして、幾重にもかさなった放射狀の板根がこちらへ廣がっていることで了解される。その黒い板囲いのようなものが、灰青色の艶をかすかにあらわしてくるのを、しだいに僕は見てとった。板根のよく發達した樹齡幾百年もの樹木が、その暗闇に、空と斜面のはるか下方の海をとぞして立っているのだ。ニュー・イングランド風の大きい木造建築の、われわれの立っているポーチの庇から、晝間でもこの樹木は、人間でいえばおよそ脛のあたりまでしか眺めることはできぬだろう。建物の古風さ、むしろ古さそれ自体にふさわしく、いかにもひそやかに限られた照明のみのこの家で、庭の樹木はまったく暗闇の壁だ。（「第1部」）

暗闇の中から見た僕の記憶に基づくと、「^{レイン・ツリー}雨の木」はその高さ大きさから見て、相當な樹齡の樹木だということが分かる。それから、ハワイという空間的な場所と關わりを持っていた。だが、小説の最後まで、語り手「僕」をはじめとする我々読み手は「^{レイン・ツリー}雨の木」の實體を目にすることは出来ない。これは一体何を意味しているのだろうか。ここで知るべきなのは、作品の中に登場する「^{レイン・ツリー}雨の木」は「宇宙樹」と呼ばれる一つのメタファーであり、實際存在するものかどうかは確かめられないという事實である。すると、ここではまず、「^{レイン・ツリー}雨の木」の暗示する「宇宙樹」の意味について考えてみたい。

神聖な存在として樹木を崇拜する風習は、どこから由來したのだろうか。樹木は古代の人類にとても重要視されてきた。郎ち食糧、医薬品、避難先、薪などをすべて樹木から手に入れたのである。このような物質的なもの他にも、樹木は人間の自覺を發達させるのに重要な役割を果たした。樹木だけの美しさ、強靱さ、品位は勿論のこと、適応力、永續性、安定性、繁殖力などは樹木の持つ情緒的で象徴的な価値だと言える。それで樹木は、古代人類の感情、熱情、愛情、信念と宗教、恐ろしさに對する象徴とされてきた。想像力の豊かな古代人類は、樹木の持っているこのような象徴的な特性を形象化し、神聖な樹木として崇拜した。それが宇宙樹である。9)

何より樹木は、地球上に存在する生物の中で一番大きく、長く生きられるものとして知られている。中でも多年生植物である松の場合、5千年も生きるそうである。このように樹木は、自然界に存在するいかなる生き物と比べても、規模や歴史から見てある種の威嚴を持っていると言えよう10)。そのためなのか、古代から世界各地では様々な樹木を神聖な「宇宙樹」——他の呼び方としては、「世界樹」、「生命の木」、「知恵の木」などがある——として崇拜してきた歴史がある。例えば、韓國では「桑」が、中國では「万年松」と呼ばれる「松」が伝説的な樹木として言い伝わっている。また、エジプトの神話では「無花果」が、ロシアの神話では「柏木」が、アメリカ原住民の神話では「榆」か「樅」が神聖な樹木とされてきたのである11)。前述した内容から分かるように樹木は昔から「生命」や「永遠」、「信義」を象徴する神聖なものとして用いられてきたし、このような捉え方は最近になってからもその痕跡を見ることが出来る。例えば、建物の竣工式や子供の誕生、國と國の間で協定を結ぶ時など、木を植えて出來事を記念する習慣は未だに残っているからである。以上の内容から見て、『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち』の中に登場する

9) * 稿者翻譯, 전영우 「동서양의 신성한 나무, 우주수」 『숲이 희망이다』, 책씨, 149-150頁

10) 이경준 (2005) 『수목생리학(2차개정판)』, 서울대학교출판부, 4-5頁

11) 전영우 「동서양의 신성한 나무, 우주수」 『숲이 희망이다』, 책씨, 151-156頁

「^{レイン・ツリー}雨の木」は、まさに「生命」や「永遠」を暗示する象徴的な樹木であることが推測できる。

そして、「第1部」のアガテーとの出会い以来、僕は女たちを通して「^{レイン・ツリー}雨の木」と関わっていく。「第2部」では、僕と僕の妻が友人である音楽家Kに招待され、コンサートに行く場面が見られる。このコンサートで演奏される曲は、僕が自分の小説のテーマとしていた「^{レイン・ツリー}雨の木」を一つのモチーフとして作られたものであった。僕は「^{レイン・ツリー}雨の木」について妻に話したことがなかったが、妻はプログラムの標題を見てすぐ次のように語る。

五月に雨の聲をまなぶらむも、あはれなりという、あの檜の木のことかしら？と『枕草子』の作者のいう露を集めて雨のようにふりそそがせる樹木の、そのけなげさを連想している様子だった。僕もそれをとくに訂正はしなかったのだ。（「第2部」）

妻は「^{レイン・ツリー}雨の木」という言葉を見てすぐ、『枕草子』に登場する檜の木に思いつく。この場面に
ついて魏浦嘉は、「崩壊を孕む救済—『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち—』の中で次のように語る。

「見る」、「見つめる」というような視覚動作で「^{レイン・ツリー}雨の木」を確認しようとする「僕」と違って、「女たち」は最初から「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴くことでそれを受容することを選んだ。（中略）僕はその存在を掴むために、「^{レイン・ツリー}雨の木」の全容を見極めようとするが、「女たち」は「^{レイン・ツリー}雨の木」の存在をその名を聴くと同時にすでに受け入れた。12)

上述した魏の見解には共感するところが多い。僕が自分の目で樹木を確かめようとしたことに對して、女たちは樹木の存在をそのまま受け入れたという解釋は、「^{レイン・ツリー}雨の木」に對する男女の異なる捉え方をよく説明してくれる内容だと思うからである。自分の納得する限り事物を認めようとする男と、物の存在をそのまま受容する女という構造は、知性で物事を理解する男と、感性で物事を受け入れる女という二分化された図式を造っているように考えられる。

とにかく、「僕」は最初「アガテー」に導かれ、暗闇の中ではあったが「^{レイン・ツリー}雨の木」と初めて出会った。それから、友人のコンサートで自分の妻と一緒に「^{レイン・ツリー}雨の木」という曲を鑑賞する。その後、日常生活の中で徐々に「雨の木（^{レイン・ツリー}レイン・ツリー）」の存在を忘れかけていた僕にある日、

12) 『國文』(94)、56-57頁

「^{レイン・ツリー}雨の木」の居場所を聞き出す「ペニー」の手紙が届く。この手紙を通して、「僕」は改めて「^{レイン・ツリー}雨の木」の存在を思い出すのであった。それで、「僕」は再びハワイを訪れ「^{レイン・ツリー}雨の木」を探し続けるが、最後まで「^{レイン・ツリー}雨の木」の実像を目にすることはなかった。それから、日本に戻ってきた僕は、「ペニー」から「^{レイン・ツリー}雨の木」が全焼したという事実を伝えられる。このように、僕に「^{レイン・ツリー}雨の木」の存在を教え、気付かせたのも、「^{レイン・ツリー}雨の木」の最期を知らせてくれたのも皆女性たちであり、「^{レイン・ツリー}雨の木」と女性たちは常に密接な関係を持っていることが分かる。

この内容に関して魏浦嘉は、作品の中に登場する女たちは樹木と男の間に存在し、その二つを繋げてくれる「^{レイン・ツリー}霊媒」に当たると解釈している。また、魏は、高安と彼の息子であるジャッカリ・Kを繋げる存在として、ペニーの役割にも注目している¹³⁾。実際、ペニーは高安の死後、高安と前妻との間で生まれた息子ジャッカリ・Kを訪れる。そして、高安が生前考えていた小説のテーマについて語り、ジャッカリ・Kの作る音楽を通して高安の生前の夢が実現されるよう働くのであった。このように『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち』に登場する女たちは、宇宙樹である「^{レイン・ツリー}雨の木」と男との間や、男と男の間を結ぶ仲介者として位置していることが分かる。しかし、厳密に言うと、主役である男たちを手伝う助っ人としてしか存在していないとも言える。特に、父親である高安の意志を、息子のジャッカリ・Kがこの世に伝えるという設定は、男性中心の家父長的な体制の反映だと考えられる。

それから、より根本的な話になるが、何故女に、男を「^{レイン・ツリー}雨の木」の方へ案内する役割が与えられたかという疑問が生じる。この問題について考える時、「^{レイン・ツリー}雨の木」の象徴する意味と生物學における女性の役割に類似性があることを言わなければならない。

女性は妊娠や出産を担当することから、大地の生命力を象徴するものとして捉えられてきた傾向がある。そして、女性が大地と言った「自然」や「生命」に喩えられたことに對して、男性は文明や文化と同一視されてきた¹⁴⁾。女性における「生命」のイメージは、生物學に基づいた母親としての役割を強調することであるが、このような理由で「生命」や「再生」、「救援」を象徴する「^{レイン・ツリー}雨の木」と女たちは緊密に結ばれていたと考えられる。しかし、女性に對する作者大江のこのような理解は、男性や女性を本質的に異なるものとして捉えることであり、女性をあくまでも母性を持つ暖かい存在、人間の歸るべき故郷、避難先といった存在としてだけ理解する男性

13) 「崩壊を孕む救済—『^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち—』、『國文』(94)、60頁

14) 『오늘의 여성학』、2003、61頁

中心的な視線が潜んでいることを指摘しなければならない。

5. おわりに

『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち』は作者大江にとって、一つの轉換点とも考えられる作品である。久々の短編小説ということをはじめ、語り手の「僕」を中心とした「私小説」風の独特な書き方で大江は文壇の注目を受けたのである。その中で、作品における「女性」に対する描寫は何より興味深いところがある。

そして、『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち』以来大江健三郎は、長編小説の主人公を女性にするか（『人生の親戚』、1989）、あるいは、女性を語り手とする作品（『静かな生活』、1990）を書くなどの変化を示している。このような作風の変化は、自分の文學世界の範囲を広げようとする作者の新たな試みだと考えられる。その意味で、『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち』は作者の意気込みが感じられる作品だと言えよう。

作品の中に登場する男たちが常に死の恐怖に襲われていることとは對照的に、女たちは自ら経験してきた不幸や悲しみを心に抱いたまま、生き續ける強靱な姿を見せている。いわゆる大江の初期作品において男性個人の姿だけに焦点が与えられ、女性という存在が殆んど注目されていなかったことを考えれば、大きな変化だと言えよう。このような変化の背景には、大江が彼のエッセイや小説を通して示していることでもあるが、人間（中でも、特に中年男性）における「ヴァルネラビリティ（Vulnerability）」、即ち「傷付きやすさ」や「弱さ」を痛感したことと密接な関係があると思われる。

しかしながら、いわゆる「女らしさ」や「女性性」というものに關する強調は、女性を一つの人格を持つ主体としてではなく、あくまでも男性に對する相對的な存在としてしか捉えていないことである。作者は、女性を自然に近い存在、生命の誕生と關わる存在として理解しながら、「人のために獻身するもの」あるいは、「忍耐づよいもの」、「男と男の間の仲介者」として描いていることが分かる。このような描寫は、作者自身は意識していないとは言え、「ジェンダーバイアス」に基づいた男性中心的な女性像を強化することであり、個性豊かな主体としての女性を表現しているとは言えない。このような意味で『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち』における女たちの在り方は、男性中心的な視点を離れていないと言える。

【參考文獻】

- 김원홍 외(2003) 『오늘의 여성학(개정증보)』, 건국대학교출판부
- 부산대학교여성연구소 엮음 (2000) 『여성과 여성학』, 중앙적성출판사
- 송무 외 (2003) 『젠더를 말한다』, 박이정
- 아드리엔느 리치 (1995) 『더 이상 어머니는 없다』, 평민사
- 이경준 (2005) 『수목생리학(2차개정판)』, 서울대학교출판부
- 탁광일 외 (2005) 『숲이 희망이다』, 책씨
- 한국여성연구소 (2005) 『새 여성학강의』, 동녘
- 홍진희(2004) 「大江健三郎의 『個人的な体験』論—男女における對照的な描寫を巡って」 『日語日文學研究』 (제49집), 439-456 頁
(2005) 「大江健三郎의 『人生の親戚』論」 『日本文化研究』 (제13집), 287-302 頁
- 青木保 (1982) 「〈^{レイン・ツリー}雨の木〉と〈乳の木(ミルク・ツリー)〉」 『海』 (14/10), 155-167頁
- 伊藤公雄他 (2002) 『女性學男性學』, 有斐閣アルマ
- 大江健三郎 (1982) 『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聽く女たち』, 新潮社
(1988) 『新しい文學のために』, 岩波書店
(1990) 『靜かな生活』, 講談社
(2002) 「『よし、僕は地獄へ行こう』という貫き方」 『婦人公論』, 2002 8
- 加藤雄二(1997) 「フォークナー, 『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聽く女たち』, そして『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』」 『英語青年』 (143/8), 418-422頁
- 魏浦嘉(2001) 「崩壊を孕む救済—『「^{レイン・ツリー}雨の木」を聽く女たち—』 『國文』 (94) , 54-65 頁
- 塚谷裕一(1993) 「素顔のマンガ—描く、大江健三郎『^{レイン・ツリー}雨の木』」 『科學朝日』 (53/4), 60-63 頁
- 根岸泰子(1997) 「〈^{レイン・ツリー}雨の木〉を聽く女たち—メタファーの受胎とその死まで」 『國文學』 (42/3), 93-99 頁
- 山田有策(1983) 「作品とその評価史; 〈^{レイン・ツリー}雨の木〉を聽く女たち」 『國文學』 (28/6), 115-118 頁
- 「對談時評:觀念と感情 後藤明生、川村二郎」(1981) 『文學界』 (35/12), 270-281 頁
- 「讀書座談:中野孝次/田久保英夫/高橋英夫」(1982) 『文芸』 (21/10), 238-254 頁
- 『大江健三郎』 (1995) 講談社(群像特別編集)

要 旨

大江健三郎の『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』(1982)は、五つの短編で構成された連作短編小説集である。この作品は、大江にとって久々の短編小説ということや、私小説に似た独特な書き方で文壇の注目を受けた。タイトルが示しているように、作品の中には「救済」や「生命」、「再生」を暗示するメタファーの^{レイン・ツリー}「雨の木」と、それと関わりを持つ女たちが登場している。女たちは不幸な状況の中でも忍耐強く生きていく強靱な姿を見せており、これはある意味で肯定的なイメージを齎している。しかし、このような彼女たちの姿には、「自己犠牲的な女」、「生命力の強い女」、「男と男の間の仲介者としての女」と言った形で、ジェンダーバイアスに基づいた女性像が反映されていることが分かる。本論文では、作品に登場する女性たちの在り方を検討することで、女性に対する作者大江の男性中心的な捉え方を指摘することが出来たと考える。

キーワード：大江健三郎、^{レイン・ツリー}雨の木、樹木、死、生命、自然、女性性、男性中心的、
ジェンダーバイアス

투 고 : 2005. 11. 30
1차 심사 : 2005. 12. 10
2차 심사 : 2005. 12. 31